

ミヤゝは星に

おい茂った樹で鬱蒼とした庭の一角にある物置小屋がミヤゝの生まれた場所である。ミヤゝの話をする前に、ミヤゝのお母さんがこの家に来た時の話をしよう。

ミヤゝのお母さんは茶トラ色で三歳、名前はマイコと言う。この名前は、三年前、生まれて、まだ三週間位しか経っていない子猫がフラフラした足取りで、この家の庭にたどり着き、物置小屋に入り込み、ぐったりして寝ていた時、見つけてくれたこの家のお母さんが付けてくれた名前がマイコである。「迷子の子猫」から思いつき、迷子ではなく、「マイコ」と付けたそうさ。その前にも違う名前を貰っていたように思うけど、マイコはもう忘れることにした。

ミヤゝの生まれたすぐ後で茶目のタマ吉が生まれ、三匹目に生まれた子は、すぐに死んでしまったようで、それに気付いたこの家のお母さんが、物置小屋の脇の空き地に三十センチ位の穴を

掘り、埋めて少し土を盛って、その上に石を載せて、手を合わせた。それで猫としては姉弟の少ない二匹姉弟の猫となったのである。毛の色が違っているのが当然ミヤくとタマ吉の父親は違わらしい。

ミヤくとタマ吉は父親を見たことも無いし、マイコ母さんから聞いたことも無い。マイコが物置小屋に入りこんで来てから、しばらくしてようやく元気になったころ、お母さんは「マイコに不妊手術をやってやらなきゃ」と思っていたが、そのうちすっかり忘れた。その後、マイコのお腹が大きくなってきた時、お母さんは「しまった遅かったね、悪かったね」とマイコに謝ったがもう遅い。それにしても、生まれてきた子猫は可愛い。ミヤくとタマ吉の名付け親は、この家の長女裕子さんである。

なぜミヤくと言う名前になったかと言うと、ミヤくが生まれて、次のタマ吉がなかなか生まれてこなかったそうで、最初に生まれた子猫が湯上りタオルの上に寝ている母親のお腹の辺りで、ミヤく、ミヤくとまだ目も開かないのに這いずり回っていたそうである、それを見ていた裕子さんが、ミヤくと言う名前にし、お母さんに言っただけで賛成してもらったそうである。

タマ吉の名前は、裕子さんの友達の家で、タマと言う名前の茶目猫を飼っているそうであるがタマは雌猫でミヤくの弟は雄である。それで名前をタマ吉と付け、これもお母さんに名前を認め

でもらって付けたそうである。裕子さんは四月に、小学校五年生になり、裕子さんの上に今年大學生になった歳の離れたお兄さんがいる。このお兄さんは、猫の親子には関心がなさそうで、庭の物置には来たことが無い。でも、猫が嫌いでもなさそうで、初めてマイコ母さんに銜えられて母屋の縁側に来た時、ミヤくとタマ吉の頭を撫でてくれた。

その後、マイコ母さんと同じように、母屋と物置とは出入り自由、夜でも、縁側のガラス戸の下が板になって、その一枚が外されており、出入り自由である。その板を取った隙間に、厚い布の切れ端を、縦に暖簾のように切り、猫は潜って入った後で、部屋に風が入らないように、してくれたのは、裕子さんのお母さんである。

一、三回行くと、様子がわかって来て、家中探検である。家は古くて部屋数が多く、広くて弟とだけだと迷子になりそうである。庭も広くて回りにきれない。慣れてくると、マイコお母さんは、庭の隅に決めている、猫専用のトイレに連れて行ってくれた。そこでマイコ母さんは「ここ以外でオシッコ、ウンチをしたら、お尻ペンペンだよ、にやぐごろう」と言って教えてくれた。「それから、おしっこ、ウンチをした後はちゃんと砂を掛けて、綺麗にしておくんだよ」と言われたが、ミヤくとタマ吉には無理な話であった。

家が余り広くて、物置に戻ると落ち着く。マイコ母さんがタオルの上で寝そべっている。弟と

一緒にお母さんのオッパイをまさぐる。お母さんのオッパイは沢山あるので姉弟喧嘩もしなくて済む。でも私は上から三番目のオッパイが一番好きで飲み終わるとすぐ寝てしまうのである。お母さんのお腹を枕にすると暖かくて気持ちがいい。お母さんのオッパイはたくさんあるのにお乳の出が悪い、出なくなったら、どうしよう、心配だな。ここで寝ているとお母さんが舌で私の頭をぺろぺろ舐めて「可愛い、可愛い」してくれるのでここが一番好きな場所なんだ。

この家（野田家）の御主人は何度も見たが、私達親子には余り関心が無い様で膝の上に乗せてくれるようなこともない、なにしろ、朝早く出掛け、帰りはいつも遅いのである。私達親子の餌や排泄物の世話、毎日の生活の面倒をみってくれるのはもっぱら、この家のお母さんと裕子さんである。

ミヤくとタマ吉はだんだんマイコ母さんと一緒に餌も食べられる様になってきた。特に裕子さんの部屋は縁側のガラス戸と同じように、ドアーの下の板を小さく切って穴を開け、猫の親子が出入り出来る様にしてきているので、いつもタマ吉と一緒に入り込み遊んでいるのである。

夏が近づくとも物置小屋はだんだん暑くなってきて、広い庭にある沢山の樹に蝉が合唱して、うるさいぐらいになって来、ミヤくとタマ吉は毎日蝉を追っかけていた。ある日タマ吉が捕まえた蝉を銜えて、得意になって裕子さんに見せようと思つて二階の裕子さんの部屋へ持つて行った。

裕子さんは「ジージー」鳴いている蟬が足元に居るのを見て「キヤー」タマ吉もこの声に驚いた。「早く外へ出して」ミヤくとタマ吉は毎朝裕子さんの部屋へ行って裕子さんと一緒にじゃれあっている、いつものように裕子さんのお母さんから、「裕子、学校に遅れるよ」と声が掛かる。裕子さんは「はい」と大声で返事をして急いで部屋を出て行く。ミヤくとタマ吉はその後を追っかけて、庭に出て、また虫取りで遊ぶのが日課になっている。

午後にはミヤくのお母さんマイコも裕子さんの部屋には時々来るが、何と無く遠慮があるようで、いつも裕子さんのお母さんのいる台所で余り動かないでいる時が多い。ミヤくとタマ吉は少しずつ人間の言っている言葉も判るようになって来た。この前、裕子さんと裕子さんのお母さんが話をしているときマイコ母さんの話をしていたのでジーと動かずに聞いていたが、二年前の春ころ、生まれてまだ三週間位の子猫が庭の物置小屋に迷い込んで、入って寝ていたそう。その子猫がマイコ母さんで、裕子さんのお母さんが探し物をしよう、と、物置小屋へ入ったら、子猫が居て、警戒する気力もなさそうに小さな声で「にゃくん」と鳴いた。お母さんには「お腹が空いた」と聞こえ、かわいそうで、すぐ母屋に戻り、牛乳が一番良さそうと思って、冷蔵庫を開けたら、ちょうど切らしていた。そこで、ご飯に白魚を入れ、煮て冷ましたものをお皿によそって、すぐ持って行き、子猫の横にそーと置いてやった。すると、子猫はよろよろと立ち上がって、

顔をお皿に突っ込んでガツガツ食べた。その後、すぐスーパーへ行き、牛乳を買って来て、暖めて、冷まして、お皿に入れてやったがペロペロやつてもよく飲めない。

午後、学校から帰ってきた裕子さんに話したら、「私が面倒見るから家で飼って」とお母さんに頼んだ。「そう、それじゃ今からスーパーへ行つて、哺乳瓶を買ってきて頂戴。今晚、お父さんに頼んでみるから」お母さんは夜、遅くなつて帰つて来たお父さんに頼んで飼うことを承諾してもらつた。そこで、ようやく、この子猫は、この家の猫にしてもらうことが出来たのである。

マイコが野田家の猫になつて、暫く後、お母さんが、近所のスーパーへ買い物に行つた時、知り合いの奥さんに、子猫の話をしたら、三週間程前に、その奥さんの家の近くで知らない女性が子猫を歩道に置いて、さつと立ち去るのを見た人が居た、と聞いたことがあるそうで「もしかしてその時の子猫かしら」「いろいろ事情があつたんでしようがかわいそうなことをするわね、と話していたのよ、あなたの家に来て二週間ぐらい、するとその時の子猫かしら、あんな小さい子猫が良く一週間も生きていられたものね」と話してくれた。すると、私が見つけるまで、その間、何を食べて生きていたんだろう。もし、私の家の物置小屋に入つて来なかつたら、数日も持たずに死んでいただであらうと思うと、かわいそうになり、急いで帰つてマイコを呼んで抱きしめてやった。お母さんの目から涙がマイコの頭に落ちた。それから、数ヶ月位、経つたある日、応接間

でお父さんとお母さんが声を荒げて、話をしているのが聞こえた。マイコは応接間に様子を見に行ったが、二人の様子に気が気でなく、遂に、二人の間を8の字を書くように、ぐるぐる歩き回った。「もう、やめてよにや〜」何度も何度も回った後で、お母さんの膝の上にぴよこんと載った。「私はお母さんの味方よにや〜」これを見ていたお父さんは「まくしやうがないか」と言った様子で苦笑いをしながら二階の書斎に上がって行った。マイコは一人（一匹）で「やった」と思った。それ以来、お母さんとマイコは一層仲良くなったようである。

また、マイコは野田家の家猫としての居場所が出来、家族の一員として認められるようになった気がする。

ある日、宅配のお兄さんが来た。インターホンがピンポンと鳴った。お母さんが玄関に出た。猫も三匹親子で出てきた。荷物は少し大きめのダンボールの箱で、開けると、中には紙を小さく丸めたような粒がたくさん入っていた。裕子さんのお母さんが言った。「これはお前たちのトイレだからね、綺麗に使うんだよ」。その小さな紙の玉は消臭剤と吸水剤が入っているようだ。

「二人（二匹）とも綺麗に使うんだよにや〜」と言ったがマイコかあさんにも初めてで良く解らず、教えてやる自信がなかった。ミヤ〜とタマジが大きくなってきたので、裕子さんのお母さんが三匹の為に、買ってくれたのである。小さなトイレ三個を早速、物置小屋の隅に備え付

け、三匹のトイレとなった。ミヤくとタマ吉は新しいトイレが珍しく紙の玉を掛合っていたがすぐマイコお母さんに「二人（二匹）とも、ここで遊ぶんじゃないのニャンゴロー」と叱られた。猫は、親兄弟姉妹でも、自分以外の排泄物の匂いを嫌い、他の猫の匂いのする場所では用をたさない習性があり、広い庭でもどんどん場所が広がって、三匹の為のトイレ化してしまうことになるかかねないことを心配して、お母さんが買ってくれたのである。

ミヤくとタマ吉の動きが活発になって来て、ついに庭の板塀の隙間から道路に出て見た。いつもは音しか聞こえなかった大きな自動車が唸り声を上げて走っている。「タマ吉、怖いから塀の中へ帰ろう」二匹は塀の隙間から急いで庭に戻った。「お姉ちゃん外は怖いね」。「タマ吉一人（一匹）で表の道路に出るんじゃないよ」とお姉ちゃんぶって言った。

次の日の昼頃いつもの様に二人（二匹）で虫取りをして遊んでいると、塀の隙間から大きな茶目猫が入ってきた。二人（二匹）は驚いて木の陰に隠れた。「タマ吉お前によく似ているな、ひよっとしたらお前のお父さんかも知れないよ」「自分の顔を見たことが無いから分からないよ」「よく分からないけどどっちでも良いか」二人（二匹）で、もぐもぐ話しているうちに大きな茶目猫はスーと塀の外へ出て行ってしまった。自分の子供が居るかどうか確かめに来たのかも。

毎日雨の日が続き、物置と母屋の中で二人（二匹）は、じゃれ合っている時、マイコお母さん

は母屋の台所でジ―としてゐることが多くなつた。

「ここ数日水はよく飲むけど餌はほとんど食べない、少し痩せてきたようだ」と裕子さんのお母さんが言つてゐた。「お母さん最近元気が無いニヤ―具合が悪いのかな―」二人（二匹）は話してゐたがすぐじゃれあいになつた。数日後、裕子さんのお母さんもマイコの様子が氣になつて、病院に連れて行つて診てもらふことにしたそうである。ミヤ―とタマ吉二人（二匹）は移動籠に入れられたマイコ母さんを心配そうに見送つた。夕方になつて、二人（二匹）は犬猫病院から帰つて来た裕子さんのお母さんと裕子さんが話をしてゐる時、ミヤ―とタマ吉は耳をそばだてて、聞いてゐた。

「お医者さんの話では、『どうも肝臓が悪いようでひよつとしたら悪性かも知れないよ』て言われたの心配だわ。先生に聞かれたの、『生まれた当初何か病氣をしましたか』って、それで家に来たときの物置小屋での話をしたら、『その時のこの子（猫）の苦勞が、今、出ているのかもしれないですね、何日も何も食べられなかつたか、ろくな物も食べていない、体に良くない物を食べたか、それが今、体に影響してゐるのではないかと思われます』て言われたの」話を聞いていたミヤ―とタマ吉は、前に聞いたことがあつたけど、お母さんにそんなことがあつたのかと思つたとションボリと二人（二匹）共うずくまつてしまつた。それから、二人（二匹）とも、マイコ

お母さんの近くで、大人しくして居ようとしたが、すぐに、じゃれあいになり、台所を駆け回ることになる。二人（二匹）の行動はいよいよ活発になり、時々、板塀を潜り抜け表通りに入る様になって来た。表通りには、今迄知らなかったが、猫が三〜四匹いつも、屯しており、「あの二匹は時々、顔を出してくるがまだ挨拶がないにやー」と言った顔をして、二匹の行動を黙って見ている様子であった。

ミヤ〜とタマ吉が連立って、三日程続けて表通りに出てみると、猫仲間の様子、雰囲気が変わるようになって来た。野田家の塀の一角だけでも、いつも、三、四、匹は居て、集会場になっていたのだ。その中でも、毛並みが綺麗か、荒れているか、食べ物は満足に食べていそうか、首輪はしているか等々で、飼われている猫か、野良猫かどうかがわかるようになってきた。空き地には四、五、匹居ることもあるが、リーダーがいて群れているのではなく、なんとなく自分の好きな場所に居るだけと言った様子である。中には仲の良さそうな三匹〜四匹が日向ぼっこをしに来ている感じで集まっているようである。

ミヤ〜とタマ吉は三匹集まっている所へ入って行った。ミヤ〜が「にや〜こんにちは」と言ったが、三匹から返事はなく「あくお前達はあの塀の家の猫だな知ってるよ」承知した顔で横を向いた。それで挨拶は終わり。ここの猫達は皆飼い猫のようである。飼い猫はおっとり、のんびり